

第1章 アーギュメントをつくる

1. 論文とアーギュメント

論文とはなにか。この問いに、ひとまずシンプルな答えを与えることから始めよう。

論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である。

これはシンプルなようでいて、論文というジャンルの文章がもつ、きわめて奥深い特質である。そもそも主張とはなにか、論証とはなにか？ その点をはっきりさせないかぎり、この定義は論文の書き方を学ぼうとする者にとって、まったく役に立たずに終わるだろう。本章を含む「原理編」では、論文の定義を徐々にクリアにしてゆくことで、「論文とはなにか」を正しく理解することを目指したい。

まず、論文は主張しなくてはならない。この「主張」を、英語では**アーギュメント** (argument) と呼ぶ。日本語の「主張」という語にわたしたちは慣れ親しんでおり、みなそれぞれ「主張とはなにか」についてのイメージをすでに抱いてしまっているので、あえて本書では以下、アーギュメントという英語を使って、それをあらたに定義してゆこう。

ルール① 論文はアーギュメントをもたなくてはならない。

このアーギュメントという言葉はアカデミアにおいて、「主張」とか「見解」を意味するほかの語彙とは異なる特別な意味合いで用いられる。アーギュメン

トというものは、その正体を誰もがわかっているようでいて、じつはきわめて曖昧に用いられている用語であり、じっさい正確に理解している者たちも、それを教えるのは非常に困難だと考えている。

アーギュメントとはなにか。すこしずつ理解を深めてゆこう。

それはまず、論文の核となる主張内容を一文で表した**テーゼ**である。ここでは「テーゼ」を、「**論証が必要な主張**」というふうに定義しておく（この定義は重要なので記憶してほしい）。アーギュメントはテーゼの一種である。ひとつの長い論文は大小いくつものテーゼを含むのだが、論文中もっとも重要な、いわば大テーゼがアーギュメントである。とりあえずこのように考えておいてもらいたい¹。

『12週間でジャーナル論文を書く』の著者ウェンディ・ローラ・ベルチャーは、論文が学術誌で不採用（リジェクト）になる理由として、査読のコメントでは議論のクオリティとか着眼点のオリジナリティとかについていろいろと言われるかもしれないが、つまるところ「**アーギュメントがないか、またはそれを適切に表現できていないこと**」が究極的な原因なのだと述べている²。

ここで注目すべきは、ベルチャーはアーギュメントが「ない」と言っていることである。最終的に査読者はアーギュメントの良し悪しを判断するのであるが、しかし、多くの論文はそれ以前の段階で、**そもそもアーギュメントをもつことに失敗している**というのだ。たとえば、じっさいわたしも自分の初期の論文などを読みかえすと、アーギュメントを提示できていないことがよくわかる。

なにかしら主張しているつもりでもアーギュメントをもたないとみなされるとは、いったいどういうことなのだろう？ あらためて、アーギュメントとはなんなのか。この問いは、これからレポートを書こうとしている学部生から、ベ

1 この用語法には揺れがあり、「テーゼ」を「アーギュメント」の意味で使う教科書も存在するが、そうした違いは言葉の定義の問題にすぎない。本書では「アーギュメント」というまだ広くは日本人に膾炙していない英単語を採用し、これをあらたに定義しながら運用してゆく。

2 Wendy Laura Belcher, *Writing Your Journal Article in Twelve Weeks: A Guide to Academic Publishing Success*, 2nd ed. (Chicago: University of Chicago Press, 2019), 66.

テランの大学教員まで、あらゆるレベルの著者が立ち止まって再考する価値のある問題である。

そこそこの媒体に掲載されるような論文でさえアーギュメントがないとなると、アーギュメントをもつことは非常に高度で複雑なことなのだろうか？ 否、アーギュメントをもつだけなら、それは単純なことである。

では、じっさいにアーギュメントをつくってみよう。

2. アーギュメントをつくる

世の中にはいろいろな「主張」が存在するが、それらのうち、どれが学問的なアーギュメントだと認定されるのか。シンプルな具体例を用いて考えてゆくことにしよう。

たとえば文学部の授業で、やなせたかしの『アンパンマン』を読み（マンガでもアニメでもいい）、同作についての発表なりレポートなりが課されたとする。さて、どんなことを主張しよう？ 以下、いろいろな主張をつくりながら、徐々にアーギュメントのほうに接近してゆきたい。まず同作について少し調べて、つぎのようなことを言ってみたとしよう。

(1) 初期のアンパンマンは長身・丸顔のおじさんだった。

この主張は、アーギュメントではない。Wikipediaでも上のほうに書いてある、ただの事実である。常識だろうがマイナーな豆知識だろうが、事実はアーギュメントにならない。では、**なぜ事実はアーギュメントではないのだろうか**。この問いに、あなたなりの考えで答えるのではなく、本稿のこれまでの定義にしたがって答えてみてほしい。

さきに重要だから記憶してほしいと念を押した、アーギュメント（テーゼ）の定義を思い出そう——それは**論証が必要な主張**なのだった。(1)は「主張」らしき体裁をもってはいるが、それは資料を調べれば正しいか間違っているかが確定してしまうものであって、「論証」できるような「主張」ではない。つ

まりそれはテーゼではない。

もちろん、これは極端に単純な例である。つづいて、多くのレポートや論文がじっさい採用しがちな「主張」の例を3つ並べて見てみよう。これらは(1)と違い、期末レポートから学術論文までのあらゆるレベルで観察できるパターンであり、あなたにも思い当たるフシがあるはずだ。

(1) は事実を述べているだけだったが、では、以下の文章は、アーギュメントではないのだとして、**具体的になにをしているのだろう**。問題形式にしてあるので、時間をとって自分で考えて、答えを言語化してみしてほしい。

例題1：つぎの3つの文が、それぞれ具体的になにをしている文なのか説明せよ。

(2) このレポートでは『アンパンマン』における女性キャラクターに着目する。

(3) 本論はフェミニズム理論を用いて『アンパンマン』を分析する。

(4) 『アンパンマン』を深く理解するために必要なのはジェンダーというテーマである。

これらのアーギュメント未満の「主張」たちは、具体的になにをしているのだろうか。アーギュメントのように見えてアーギュメントではないものをきちんと知ること、アーギュメントの実態を浮き彫りにしてゆきたい。

(2) は「着目する」と言っている。つまり、ある事象を観察して（この場合は作品を読んで）、そこで自分が個人的に気になったモチーフ（女性キャラ）を抽出したところまでで終わっているのが(2)である。この一文がやっているのは、**トピックの設定**である。これはアーギュメントではない。

(3) もおそらく女性キャラクターという同様のトピックに着目することになるだろうが、ここではその分析において依拠する理論的な枠組み（フェミニズム）が挙げられている。この一文がやっているのは、**方法論の宣言**である。これもアーギュメントではない。

(4) はほぼ同様のトピックを設定したうえで、それが作品理解の条件だと主張している。すなわち、ある特定のトピックが「重要である」と言っているのが(4)だ。この一文がやっているのは、**価値判断**である。これは主張らしき体裁をなしてはいるが、やはりまだアーギュメントではない³。

では、これらのなにが問題なのだろうか。言い換えれば、これらの「主張」はなぜアーギュメント未満だと見做されるのだろうか。

ここでたび、アーギュメント（テーゼ）の条件を思い出そう——それは**論証が必要な主張**なのだった。(1)から(4)は、どれも論証を要求する文ではない。もちろん女性キャラの分析は可能だし、フェミニズム理論を用いた『アンパンマン』論は重要な仕事になるだろう。しかし、アーギュメントの条件は、それが**論証を要求する主張**であるということなのだ。

おそらくまだわかりにくいと思うので、これを読者の側のリアクションで説明しなおしてみよう。「フェミニズムで分析します」と聞いたときのわたしたちのリアクションは、たとえば「そうですか、ではどうぞやってみてください」といったものになるだろう。「フェミニズムで分析します」という主張は、**そもそも論証できるような言明ではないのだ**。

アーギュメントが読者から引き出さなくてはならない反応は、「本当にそうなのか？ じゃあ論証してみろ」といったものである。それが「**論証が必要**」ということの意味なのだ。つまりアーギュメントとは、**論証なしには納得してもらえない主張、論証を要求するような文**になっていなくてはならないのである。

この定義を再確認して(2)から(4)に戻ると、これらがすべてなんらかのトピック（ジェンダー）なりツール（フェミニズム理論）なりを**名指したにすぎない**ということが見えてくるだろう。上述した例はすべて、「**研究対象 + X**」という**組み合わせを宣言しただけの文**である。研究対象や X がいかに高度にアカデミックなものであろうとも、この形式から抜け出さないかぎり、それが

3 価値評価と論証については、次章で扱う野矢が簡潔にまとめている。野矢茂樹『新版 論理トレーニング』（産業図書、2006年）、87-96頁。

アーギュメントに到達することはない。

ただし、これらはアーギュメント未満の主張ではあるものの、だからといって論文と無関係というわけではない。論文を書くとき、ある重要と思われるトピックを選択し、それをなんらかの方法論で分析するという作業は不可欠である。これらはアーギュメントと**無関係**なのではなく、あくまでもアーギュメント**未満**の段階にある作業なのであり、「論文」を書くためには、その先に進む必要があるのだ。

よく「文学部のやっていることは読書感想文とかわらない」といった意地の悪い批判があるが、これはあながち偏見ではない。(2)と(4)は、つまるところ「Aが面白いと思いました」「Bが大事だと思いました」という「感想」にすぎないし、たとえ(3)のようにアカデミックな枠組みを援用したとしても、その作業をつうじて論証するアーギュメントを提示できないならば、それはやはり、アカデミックなリソースを参照して書かれた読書感想文どまりである。

では、論証を要求するような主張とはどういったものなのか。この「論証を要求する」という側面を確実に満たすためのもっともシンプルな方法は、アーギュメントを「この論文は～を示す」という構文で書くことである。

なんとも低次元な話だと思うかもしれないが、上記の(2)と(3)はこの構文で書き換えることすらできないことに、あなたは気づいているだろうか。これは初心者にもすぐに実践可能でありながら、どんなに熟練のプロでも採用している方法論である。

では、ひきつづき『アンパンマン』とジェンダーの例をつづけながら、この構文でテーゼをつくってみよう。たとえば――

(5) この論文では、『アンパンマン』においてはアンパンマンとばいきんまんという男同士の物語ばかりが注目されていることを示す。

これはぐっとアーギュメントに接近している。その理由はまず、「男の話ばか

りだ」という観察が一定程度の論証を必要とする主張だからだ。これらの主張はかならずしも自明ではなく、「本当か？　じゃあ示してみろ」という反応を
読者から引き出すような内容をもっている。これを（4）の「ジェンダーが重要である」という曖昧な主張と、いまいちど比較してみてほしい。

この「じゃあ示してみろ」とか「本当にそうなの？」といった反応を引き出せるかどうかは、その言明がアーギュメントであるかどうかを測定する重要な指標だ。この違いの正体は、**反論可能性の有無**である⁴。たとえば（5）なら、「いやいや『アンパンマン』は男の話ばかりではないだろう」という反論が誰でもすぐに思いつくはずだ。これとくらべれば、（1）～（4）はそもそも反論すらしにくい形式の文になっていることがわかると思う。

経験の浅い論者は、誰もがただちに納得してくれる「正しい」議論を展開せねばならないと考えてしまいがちである。たしかに論文においては自分のアーギュメントの正しさを説得的に論証することができなければならないのだが、しかし、論証なしに誰もが納得するような自明な意見に価値はない。**むしろ反論可能であるからこそ、主張はアーギュメントたりうるのである**。反論可能性は論文の条件なのだ。

このことがわかれば、以下のルールは同じものであることがわかるだろう。

ルール② アーギュメントは論証を要求するテーゼでなくてはならない。

ルール②' アーギュメントは反論可能でなくてはならない。

（4）までとくらべれば、たしかに（5）はかなりアーギュメントに近づいている。とはいえ、（5）が提出している主張を抽象化すれば、それは同作が「男性中心主義的である」という批判であり、これはまだ「男の話」ばかりで「よくない」という、作品がもつ傾向の観察と、価値判断の次元に留まっていると批判することもできる。これは、まだまだアーギュメントとしては弱い。

4 これはアカデミアの世界においては一般的に「反証可能性」というタームで知られている。参照：カール・R・ポパー『科学的発見の論理』大内義一・森博訳（恒星社厚生閣、1971年）。

論文を書こうとすると、誰もがアーギュメント未満のトピックや観察をまず手に入れる。それらはいわば「ネタ」である。ネタが揃ったら、つぎにそれを、論証を要求するような形式の主張、つまりアーギュメントへと書き換える必要がある。そして、こんどはそのアーギュメントをどんどん強化してゆかねばならない。このプロセスを、私は「**アーギュメントを鍛える**」と呼んでいる。

ではどうすればアーギュメントは鍛えられるのだろうか？ アーギュメントが「強い」とは、いったいどういう事態を指すのだろうか？

3. アーギュメントを鍛える

どうすればアーギュメントは鍛えられるのか。そのひとつの方法は、たとえば「男の話ばかりだよなあ」といった観察を得たとしたら、それを「**AがBをVする**」という形式の文に落とし込むことである。これを**他動詞モデル**と呼ぼう。これはアーギュメントの唯一の形式ではないが（大事なのもういちど言うが、他動詞モデルだけがアーギュメントの形式なのではない）、アーギュメントの強弱ということの意味を理解し、アーギュメントを鍛えるというプロセスを学ぶために、非常に役に立つテクニックである。

すこし脱線するが、ここで**他動詞**という文法用語についての簡単な説明を挟みたい。

英語などの言語では、動詞は自動詞と他動詞に厳密に区分される。このうち他動詞は、「ある存在 A」が「べつの存在 B」にたいしてなにかをする、という意味の動詞である。have, take, get, make など、英語の基本動詞のほとんどが他動詞であり、たとえば I have a pen なら、私 (A) がペン (B) を手に持つ、という行為の記述である。ここで、A と B (私とペン) はべつの存在であることに注意してほしい。

それにたいして自動詞の文は A の動作を記述するだけであり、そこには「べつの存在 B」が登場しない。動詞の意味的にも「べつの存在に対してなにかをする」という意識が希薄である。たとえば walk や laugh などがわかりやすく、これらは働きかける客体 B (目的語) がなくても成立する動詞だ (歩いていると

きAが地面に働きかけているという意識は希薄である)。

ポイントは、他動詞の文にはAとBという2つのプレイヤーが登場するのにたいして、自動詞はひとりで完結する行為の記述であるということだ。これで「自」と「他」という漢字が用いられている理由がわかるだろう。**他動詞とは、AとBという二者の関係を動作でむすぶことで記述するための装置である。**

さて、上記の説明をふまえたうえで、つぎの例題に取り組んでみよう。(5)を他動詞モデルで書き換える問題だ。もちろん答えはひとつではないので、あくまで念頭にあるトピックはジェンダーであるということを踏まえつつ、自分なりに答えを出してみしてほしい。

例題2：つぎの文を「AがBをVする」という他動詞モデルで書き換えよ。

『アンパンマン』においては、アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語ばかりが注目されている。

まず気づくべきは、この文には「アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語」というひとつの要素しか存在していないということだ。誰がそれに注目するのか、その主体も不明確である。まずはその点を明確にしつつ他動詞モデルで書いてみると、

回答例1：『アンパンマン』は男性キャラクターばかりを描く

このようになるだろう。『アンパンマン』がA、「男性キャラクター」がB、「描く」がVである。

もうすこし進めてみよう。この著者の関心はジェンダーなのだった。そして「男ばかり」だと書いているということは、その裏には「女性キャラクターを描いていない」という批判的な意図があることがわかる。そこで「女性キャラクター」という新たな項目を立てて、もっと強いアーギュメントがつかれないか考えてみよう。

ここでの観察は、『アンパンマン』では男性キャラクターばかりが前景化され、女性キャラクターが蔑ろにされている」ということになるだろう。ここであえてこの例を挟んだのは、これがよくあるパターンだからである。つまり、「描かれ」「蔑ろにされる」という受動態が用いられているということだ。AとBの様態がそれぞれ受動態で記述されることで、その動作の主体が曖昧になっている。

これを他動詞モデルに書き換えるという操作は、すなわち「AとBの関係を動作で記述するにはどうすればよいか？」と自問することにほかならない。男の物語が女性キャラをどうするの？

この書き換えにおいて「前景化」は使えないし、「蔑ろにする」を使って「男の物語が女性キャラクターを蔑ろにする」と書くと、ちょっとニュアンスが変わってしまう。なので、**文意を汲んで新しく動詞Vをひねり出さなくてはならない**ことになる。ここでAがBにたいして働きかけている内容はなにか？それはおそらく「目立たなくする」、「周縁に追いやる」といった意味だろう。だからこれを、

回答例2：『アンパンマン』においては、アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語が、女性キャラクターを周縁に追いやっている。

たとえばこのように書き換えることができる。「男同士の物語」がA、「女性キャラクター」がB、そして他動詞が「追いやる」だ。他動詞モデルで書き換えるだけで主張が一気にアーギュメントらしくなる理由は、このモデルで書くと、それが**観察の漠然とした記述ではなく、著者が自分の責任において提出している、論証が必要な主張であるという側面が際立つためだ。**

他動詞モデルの大きなメリットのひとつは、**アーギュメントを構成する要素(AとBとV)を整理して、その各要素をそれぞれ鍛えてゆくという道筋が見えやすくなる**という点にある。ためしに「アンパンマンとばいきんまんという男同士の物語」と「周縁に追いやる」をもっとシンプルに書けば、

回答例3：『アンパンマン』においては、男性中心主義的な物語が女性キャ

ラクターを排除している。

こんな感じになるだろう。ここからさらに、ではAの「男性中心主義」とは作中で具体的にどういう事態を指すのか（たとえば男性キャラが抑圧的な家父長として振る舞う傾向にあるのか?）、Vにあたる女性キャラクターの「排除」とは具体的にどういった事態を指すのか（登場しなくなるのか、主体性を奪われるのか?）、そして、そのジェンダー的なアンバランスは結局のところなにを意味するのか、さらには、なぜそのアンバランスの指摘が重要なのか——このように自問を繰り返すことで、**AとBとVそれぞれの要素で用いている言葉をより研ぎ澄ましてゆく作業**に入ることができる。

これがアーギュメントを鍛えるということであり、それはとりもなおさず、**自分がなにを主張したいのかを明確化する作業**にほかならない。論文を書きはじめる前に、たっぷり時間をとって取り組みたい作業だ。

この他動詞モデルのメリットを掘り下げるために、英語圏で頻繁に言及されるアカデミック・ライティング教育の3つの教えに触れておきたい。

第一に、多くの標準的なライティングの教科書が「強い動詞を使え」と教えている。これは一面では英語圏に特有の問題で、たとえばケイト・トゥラビアンは「have, do, make, be」などの「無内容な動詞」を避けよと言っているが⁵、英語はこういった意味の希薄な動詞が多いからこそ「強い（＝具体的な意味をもつ）動詞」というアドバイスが生きてくるわけだ。だがこの話は日本人でも、アーギュメントの強弱という感覚を掴むのに役立つ。(5)の「女性が蔑ろにされている」という観察を回答例3で「排除する」という明確な意図をもつ「強い」他動詞で書き換えたのは、こうしたアドバイスの実践例である。**他動詞モデルにおいては、動詞の強さとアーギュメントの強さは表裏一体である。**

第二に、英語圏でもっとも聞かれるアドバイスのひとつが「受動態を避けろ」というものだが、これは日本人の日本語執筆においても参考になるうえ、動詞

5 Kate L. Turabian, *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations*, 9th ed. (Chicago: University of Chicago Press, 2018), 117. [ケイト・L・トゥラビアン『シカゴ・スタイル 研究論文執筆マニュアル』沼口隆・沼口好雄訳（慶應義塾大学出版会、2012年）]

の強弱の問題と密接に関連している。たとえば「女性が蔑ろにされている」という受動態では「蔑ろにする」主体が曖昧になるのに対して、回答例3のように他動詞「排除する」を使うと、**誰が誰を排除するのかが文法的に避けられない要素として浮上し、結果として主張内容がクリアになる**。他動詞モデルではAという主体とBという客体を明示したうえで、AがBになにををするのかという行為（action）を記述せざるをえないため、内容が具体的になるわけだ。

第三に、英語圏では論文で一人称の“I”を積極的に使うように指導することが長らく一般化している。ためしに、大学出版局から出ている研究書やジャーナルに掲載された論文のアブストラクト（要旨）に目を通してみるといい。あなたは“I argue”というフレーズの頻用ぶりに驚かされることだろう。日本でこの文化が浸透していないという事実それじたいはとくに問題ではないのだが、アーギュメントを提出する箇所において一人称“I”を使うという感覚と、「ここが自分のアーギュメントなのだ」という強い自覚とは、密接につながっている。**論文とは、あなた個人の主張を提出し、それを論証する責任を負う、そういう場なのだ。**

4. 結論

上記の内容はアーギュメントの意味を理解してもらうための方法的な内容であって、われわれはまだ論文執筆に十分なアーギュメントの構築に到達したわけではない。

アーギュメントを「鍛え抜く」ような訓練もいっばうで必要なのだが、読者にはまず、**回答例3レベルのアーギュメントを日常的にたくさんつくる練習を積む**ことをお薦めしたい。

アーギュメント構築の練習の機会は、そこらじゅうにある。ふだん映画やドラマなどの作品を観たときでもいいし、ニュースを見たときでもいい。あるいは他人の意見を聞きながら、その人のアーギュメントをセンテンスにする、あるいはそもそもアーギュメントをもっているかどうか考えるといった作業も役に立つだろう。

あるいは、たとえばSNSなどで盛り上がっている議論を目にしたとき、あなたは自分のアカウントで、「考えさせられた」とか「Xが重要だと思う」などとは簡単に言えても、「AはBをVしているのだ」といった強い主張を発信することに、一定程度の躊躇を覚えるはずだ。それがアーギュメントに接近している証である。反論可能性にさらされ、論証の責任をとる主張、それがアーギュメントである。

いま、もしかするとアーギュメントというのはいづいぶん喧嘩腰だなと感じている読者がいるかもしれない。これは英語圏にも存在する誤解で、そもそも argue は日常的な用法においては「言い争う」といったニュアンスの強い動詞である。この点についてトゥラビアンは、この意味でのアーギュメントは相手を「言い負かして黙らせる」ことが目的であるのに対して、アカデミックなアーギュメントというのはいは「好意的だが懐疑的でもある仲間との会話のようなもの」だと述べている。彼らはあなたのアーギュメントにかならずしも反論しない（するかもしれない）が、ともかく、そのアーギュメントが十分に論証されたと考えるまではその意見を受け入れることはない⁶。あなたが想定すべき「読者」像は、そのような存在だ。

アカデミアとはつまるところ、こういった「会話」の総体である。それは日常会話よりは間違いなく論争的な営為だが、研究者はあくまでも共通の目的に向かってああでもないこうでもない議論を繰り返しているのであって、たとえば著者Aが著者Bを批判したという事実をスキャンダルのように捉えるのは素人の感覚だ——これがまさしく次の章でとりあげるトピックである。

本章は冒頭で「論文とはなにか」と問い、そして「論文とは、ある主張を提示し、その主張が正しいことを論証する文章である」と書いた。そう、これがまさしく本書のアーギュメントなのだ。そして、このアーギュメントを、わたしたちはいまから鍛えてゆくのである。現時点でこれを言い換えれば、次のようになるだろう——

論文とは、アーギュメントを論証する文章である。

6 Turabian, *A Manual for Writers*, 52.

いまあなたには、この定義の意味が、本章の冒頭とはまったく違って見えているはずだ。

コラム 査読について

本書に何度も登場する「査読」という制度について、すこし詳しく解説しておこう。研究者は論文を書いて出版することが仕事の中心にあるわけだが、執筆者が学会誌（ジャーナル）に論文を投稿すると、専門家によってスコアがつけられ、そのジャーナルに載せてもよいかどうか厳正に審査される。これが「査読」なのだが、その審査過程は、初学者が想像するよりもはるかに厳しいものである。

はじめてジャーナルに投稿するとき、多くの院生にとって初の経験となるのは、読者の顔が見えないという事態である。どこの誰だかわからないがその論文のトピックについて詳しい専門家によって自分の論文がジャッジされるわけだ。彼らは悪意をもって読むわけではないが、しかし、それは自分の顔や声や性格や癖や興味や研究内容などを知っている「厳しい」指導教員に読んでもらうのとは、わけが違う。

投稿された論文は、学会が選んだ編集委員と、場合によっては外部の専門家の、2名ないしは3名によって読まれるケースが多い。学会にとってジャーナルに載せる論文のクオリティは沽券にかかわる問題であり、彼らは執筆者が未熟な院生であることなど斟酌してくれない。あなたはジャーナルへの論文投稿で、はじめて大学名や研究室などのバックグラウンドを失い、生身の研究者として審査員たちのまえに立たされることになる。これが査読である。

……と書いてみたが、これはなにも脅かそうとして書いたわけではない。このことが重要なのは、論文というのは冒頭から「これはダメそうだ」と思われないように、かなり警戒・工夫して書かねばならないということである。とくに1本目の査読論文は、ガチガチにビビりながら書くくらいでちょうどいい。しかし、そうなるとこんどはなかなか1本目の投稿に踏みこめないという事態に陥りかねないのだが、そのあたりのバランスを、本書でつかんでもらおうというわけだ。